

井戸端会議

本頁では、生産者と消費者の双方の方々から御意見をいただくことにより、今後の食料・農業・農村について、いかに考えていくのか共通認識ができればと考えております。

伝えよう!「農の心」

数年前、小作料の支払いに行く農家の庭先で、黙々とほうれん草をこしらえ束ねる「おばあさん」がいた。タライ一杯に溜めた水の傍で、寒中の日だまりとはいえゴム手袋も使わず作業していた。声を掛けると「わしは、毎日、ほうれん草100束作って直売所に持ち行くのが日課なんだ。」と、その手同様しわの深い顔で、にっこりと笑う。その目は、生き生きと輝いていたのを今でも忘れられない。

年齢は、後に知ったのだが当時100才であった。この「おばあさん」にとってほうれん草は、「生きる」糧、まさに「生きがい」であったろう。そんな「思い」など知る良しも無く、100束のほうれん草は、買われていったのであろう。100才の「おばあ

埼玉県・坂戸市 亀田 康好さん

さん」が、こさえたほうれん草と伝えられれば、2倍、3倍の値で売れたらうし、自然と食べる時には両手を合わせ「いただきます。」と頭を下げる気持ちになれるであろう。その後、一束のほうれん草に込められた、農業者の思いを知ってほしいと、食のイベントで「ほうれん草荷造り体験」をやっている。何気なく買っている食材に込められた農業者の心を、消費者に伝える事で社会問題となっている「いのち」や「生きる」についても考えて貰えれば幸である。



「もったいない。」忘れないで 埼玉県・ふじみ野市 大貫 珠江さん

私が幼い頃、両親は農業で野菜を作り、市場に出荷し生活していましたので、物を作る大変さはわかっているつもりです。ですから、以前できすぎた何種類かの野菜を農家の方が処分しているニュースを見て、「何で、もったいない事をするんだろう」と思っていました。

色々な理由があるのかも知れませんが、とても残念に思ったのは、私だけでしょうか。

このままでは、食物をそまつにしてしまう子供たちが増えてしまうのではないかと心配しています。

できすぎた物を処分してしまうのではなく、どうしたらむだにならないように出来るか、生産者と国の方々に考えてほしいと思っています。

生活するのに「食」というのは、大切な物の一つだと思っていますので、買う側の私たちも考えてみたいと思います。

